

ノルマン征服から13世紀初めまでのアングロ・サクソン諸法集：手書本の伝来状況に着目して

苑田, 亜矢
熊本大学法学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1792154>

出版情報：法政研究. 83 (3), pp.659-696, 2016-12-15. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

ノルマン征服から13世紀初めまでのアングロ・サクソン諸法集 —手書本の伝来状況に着目して—

苑 田 亜 矢

はじめに

第1節 アングロ・サクソン諸法

第2節 ノルマン征服以前の手書本とその伝来状況

第3節 ノルマン征服以降の手書本とその伝来状況

—「法全書」と「パンフレット」—

第4節 ノルマン征服以降の手書本とその伝来状況—法的著作—

おわりに

はじめに

アングロ・サクソン時代の法、法典、法的論考、そして協定等の実に様々な法テクスト (Anglo-Saxon legal texts) (以下ではこれらをアングロ・サクソン諸法と表記する) を伝える手書本 (manuscripts) のうち、現存するものの大多数は、アングロ・サクソン時代ではなく、その後のノルマン征服以後の時代に由来すると言われている。⁽¹⁾ ノルマン征服以後の時代に由来する手書本に関する研究は近年益々盛んで、⁽²⁾ それらの研究が指摘するのは、第1に、ノルマン征服から12世紀前半までの

⁽¹⁾ T. Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon Legal Texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', *Historical Research*, vol. 86, no. 233, 2013, pp. 536-549, p. 537; B. O'Brien, 'Pre-Conquest Laws and Legislators in the Twelfth Century', in M. Brett and D. A. Woodman eds., *The Long Twelfth Century View of the Anglo-Saxon Past*, England & USA, 2015, p. 232も参照。

⁽²⁾ 最近の研究の一部を挙げておく。M. Brett and D. A. Woodman eds., *The Long Twelfth Century View of the Anglo-Saxon Past*, England & USA, 2015; T. Gobbitt, '(Old) English, Anglo-Saxon Legal Texts in the Later 11th to Mid-12th Centuries', *Literature Compass*, 10/8, 2013, pp. 618-630; T. Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon Legal Texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', *Historical Research*, vol. 86, no. 233,

時期に、アングロ・サクソン諸法が法集成 (collections) として編集されたり (compiled)、筆写コピされたり (copied) していることである。第2に、ノルマン征服から12世紀前半までの時期に編集されたり、筆写コピされたりした法集成が、12世紀後半に数多くの手書本に盛んに筆写コピされていることである。本稿では、法集成とは、複数の既存の法を収集し編集したものを指し、アングロ・サクソン諸法集とは、アングロ・サクソン諸法の法集成を意味することとする。⁽⁴⁾

従来の研究を振り返ると、ノルマン征服から12世紀前半までの手書本には、12世紀後半のそれと比べると、より早い時期から研究の光が当てられてきた面がある。何故なら、その時期に由来する手書本は、ノルマン征服より前の時期のイングランド法を解明しようとするアングロ・サクソン法研究者や、イングランド法に対する

2013, pp. 536-549; T. Gobbitt, 'Miniaturing as Emendation: I-II Cnut in Cambridge, Corpus Christi College, MS 383', in W. Scase, R. Copeland, and David Lawton eds., *New Medieval Literatures*, 13, 2012, pp. 99-112; T. Gobbitt, 'Audience and Amendment of Cambridge, Corpus Christi College 383 in the first half of the Twelfth Century', *Considerations of Audience in Early and Modern Medieval Studies*, vol. 2 (1), 2009, pp. 6-22; J. Hudson, 'From the *Leges to Granvil*: Legal Expertise and Legal Reasoning', in S. Jurasinski, L. Oliver and A. Rabin eds., *English Law before Magna Carta: Felix Liebermann and Die Gesetze der Angelsachsen*, Medieval Law and Its Practice, 8, Leiden, 2010, pp. 221-249; S. Irvine, 'The Compilation and Use of Manuscripts Containing Old English in the Twelfth Century', in M. Swan and E. M. Treharne eds., *Rewriting Old English in Twelfth Century*, Cambridge, 2000, pp.41-61; B. O'Brien and B. Bombi eds, *Textus Roffensis: Laws, Language, and Libraries in Early Medieval England*, Studies in the Early Middle Ages, 30, Turnhout, 2015; B. O'Brien, 'An English Book of Laws from the Time of *Granvill*', in S. Jenks, J. Rose and C. Whittick eds., *Laws, Lawyers and Texts: Studies in Medieval Legal History in Honour of Paul Brand*, Medieval Law and Its Practice, 13, Leiden, 2012, pp. 51-67; B. R. O'Brien, *Reversing Babel: Translation among the English during an Age of Conquests, c. 800 to c. 1200*, University of Delaware Press, 2011; B. O'Brien, 'Translating Technical Terms in Law-Codes from Alfred to the Angevins', in E. M. Tyler ed., *Conceptualizing Multilingualism in Medieval England, c. 800-c. 1250*, Turnhout, 2011, pp. 57-76; B. R. O'Brien, *God's Peace and King's Peace: The Laws of Edward the Confessor*, Pennsylvania, 1999.

⁽³⁾ オブライアンによれば、「アングロ・サクソン時代ないし征服時代のもとの認識される諸法を記載している本を筆写コピすることは、12世紀後半にその絶頂を迎えた」(O'Brien, 'An English Book of Laws from the time of Granvill', p. 51) とされており、「1066から1154年の間に編集されたか翻訳された法典 (law codes) や論考 (treatises) は、12世紀後半に数多く筆写され、様々な文脈で現れる。1150年頃から1200年頃の間にかかれた、法テキスト(神判の手引き、戴冠式宣誓、破門以外) を記載している現存する手書本は27点あり、アングロ・サクソン時代全体に由来する手書本が僅か10点であることと対照的である」(Ibid., p. 52) と指摘されている。http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/culturalcontexts/2_Law.htm (accessed 2016/09/09) における T. Gobbitt, 'Law-Codes'の説明も参照。このサイトについては、後述する。

⁽⁴⁾ 法集成の意味については、法典と比較して述べた次の説明を参照。「法典とは、支配者ないし政府によって特定の時点で制定・公布され、(既存の法を含むことはあるが) それ以前における当該領域のすべての法にとって代わる新しい法である。これに対して法集成は、公的権威の有無にかかわらず、また加筆・修正を経て作成されたか否かにかかわらず、新旧の既存の法の体系的集成であり、したがって収録された個々の法の効力が集成行為によって生ずるという性質のものではない」(直江真一「法典・法集成」高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、2005年、229-254頁、229頁)。

ノルマン征服の影響を明らかにしようとする研究者にとっては、言うまでもなく、貴重な史料だったからである。これに対して、12世紀後半に由来する手書本は、そのような研究者達によって—アングロ・サクソン法典の史料集を編集するために手書本を校合する際に参照されたことを除き—研究対象とされることはほとんどなかった。さらに、12世紀後半のヘンリ2世治世はコモン・ローの形成期と位置づけられることから、それらがコモン・ロー研究者によって研究の対象とされることもない状況だった。コモン・ロー研究者が注目したのは、ヘンリ2世のアサイズ、コンスティテューションズ、チャーター、そして『グランヴィル』⁽⁵⁾といった、コモン・ローの形成過程を跡づけることが期待できる史料だった⁽⁶⁾。そこでは、12世紀後半に由来するアングロ・サクソン諸法の手書本は、12世紀後半に通用していたイングランド法を語るものとは見なされていなかったのである。しかし、次のような素朴な疑問が生じるだろう。12世紀後半の人々（筆者や所持者等）は、何のためにアングロ・サクソン諸法を盛んに筆写したのだろうか。

アングロ・サクソン諸法の法集成が、ノルマン征服以後の時代に編集されたり、盛んに筆写されたりした動機ないし理由は、従来の研究でも説明が試みられてきた。全ての法集成について同一の動機ないし理由があったというわけでは必ずしもないが、書記の好古趣味や歴史的思考⁽⁷⁾、被征服地の異なる法文化を把握しようとする征服者ノルマン人による試み、異なる民の間に結ばれる和平協定に対するノルマン人の関心⁽⁸⁾がその動機ないし理由だというわけである⁽⁹⁾。

⁽⁵⁾ 1189年頃に成立した『イングランド王国の法と慣習についての論考 (Tractatus de legibus et consuetudinibus regni Anglie)』のことである。当時の最高法官 (Chief Justiciar) だったラヌルフ・グランヴィルの名がインキビトに書かれているため、『グランヴィル』と通称されているが、著者は不明である。

⁽⁶⁾ このような指摘は、O'Brien, 'Pre-Conquest Laws and Legislators in the Twelfth Century', pp. 229-230にも明示されている。なお、ヘンリ2世のアサイズとコンスティテューションズについては、差し当たり、苑田亜矢「国王ヘンリ2世のConstitutionesとAssisaについて——[1169年のConstitutiones]をてがかりに——」國方敬司・直江眞一編『史料が語る中世ヨーロッパ』刀水書房、2004年、5-33頁を参照。

⁽⁷⁾ R. W. Southern, 'Presidential Address: Aspects of the European Tradition of Historical Writing: 4. The Sense of the Past', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th ser., vol.23, 1973, pp. 243-63; Gobbitt, 'The Twelfth-century rubrication of Anglo-Saxon legal texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', p. 540. O'Brien, 'Pre-Conquest Laws and Legislators in the Twelfth Century', p. 229も参照せよ。

⁽⁸⁾ M. P. Richard, 'The Manuscript Contexts of the Old English Laws: Tradition and Innovation', in P. E. Szarmach ed., *Studies in Earlier Old English Prose*, New York, 1986, pp. 171-192, 181-187; P. Wormald, *The Making of English Law: King Alfred to the Twelfth Century*, Oxford, 1999 (以下、Wormald, *Making of English Law*と略記), p. 236.

他方、最近の研究によれば、次の諸点が明らかにされている。それは、第1に、ノルマン征服以後の時代に、アングロ・サクソン時代の文献が盛んに筆写されるとい現象は、法分野に限らず、多様な分野の文献（年代記、カーチュラリー、聖人伝、聖書、福音書、典礼書、説教書、修道院規則、詩、文法書など）に認められる大きな社会的文化的現象である点、第2に、法分野を含む多様な分野におけるノルマン征服以後の時代の筆写活動においては、古英語版のみならず、ラテン語やフランス語への翻訳版が作成されている場合が少なくない点、そして、法集成については、第3に、筆写時点の時代に適合させるため、改変、追加、修正が加えられている場合がある点である⁽¹²⁾。

以上のような最近の研究動向に鑑みれば、ノルマン征服以後の時代にアングロ・サクソン諸法が数多くの手書本に法集成として編集ないし筆写された理由や目的については、編集ないし筆写された当時の社会生活との関係を視野に入れて再検討する余地があるように思われる。

本研究の最終的な課題は、ノルマン征服から13世紀初めまでという比較的長い時期を視野に入れつつも、とりわけ12世紀後半以降に盛んに筆写された法集成の手書本を中心に検討することにより、それらの法集成の手書本が盛んに筆写された理由ないし目的を解明することである。それは、12世紀後半という時代にアングロ・サ

⁽⁹⁾ Richard, 'The Manuscript Contexts of the Old English Laws', pp. 181-187; Wormald, *Making of English Law*, pp. 235-236. 征服者たるノルマン人が、アングロ・サクソン諸法に含まれる、例えばアングロ人とデーン人、或いはアングロ人とウェールズ人の和平協定に関心を寄せたのではないかと考えられている。

⁽¹⁰⁾ イギリスの芸術・人文科学研究会（Arts and Humanities Research Council）の助成を得てレスター大学とリーズ大学とによって進められたプロジェクトの成果「1060年から1220年までの英語手書本の作成と利用（*The Production and Use of English Manuscripts 1060 to 1220*, edited by Orietta Da Rold, Takako Kato, Mary Swan and Elaine Treharne (University of Leicester, 2010; last update 2013)（以下、*English Manuscripts*と略記）、available at <http://www.le.ac.uk/ee/em1060to1220>, ISBN 095323195X）を参照。1枚のみで現存している手書本やカーチュラリーを除き、約204点の手書本が調査の対象になっている（E. Treharne, O. Da Rold, and M. Swan, 'Introduction', in do., *New Medieval Literatures*, vol.13, 2011, p. 1）。M. Faulkner, 'Archaism, Belatedness and Modernisation: 'Old' English in the Twelfth Century', *The Review of English Studies*, New Series, vol. 63, no. 259, 2011 pp. 179-203; O. D. Rold, 'English Manuscripts 1060 to 1220 and the Making of a Re-source', *Literature Compass*, 3/4, 2006, pp. 750-766; M. Swan, 'Post-conquest Old English Literature (1066-1215)', *Literary Encyclopedia*, 8, May 2003 (available at <http://www.litencyc.com/php/sttopics.php?rec=true&UID=1278> (accessed 2016/09/09) も参照。

⁽¹¹⁾ 例えば、<http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/catalogue/mss.htm> (accessed 2016/09/12) の「content」欄の言語を参照。

⁽¹²⁾ 例えば、Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon Legal Texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', pp.547-548を参照。

クソン法の観点からも光を当てることにより、この時期の法制度や法生活を、コモン・ロー形成史の文脈のみで捉えることを超えて、広くイングランド法史の流れの中に位置づける試みでもある。本稿は、その課題の解明のための準備作業として、ノルマン征服から13世紀初めまでの時代に由来する手書本の情報（内容、推定作成地、推定作成時期、サイズ等）を整理し、その情報に関する若干の分析を行なうものである。

以下では、まず、アングロ・サクソン時代の諸法を確認し（第1節）、次に、ノルマン征服の前と後に時期を分けて、アングロ・サクソン諸法の手書本の伝来状況や各手書本の情報を整理し（征服前については第2節、征服後については第3節と第4節）、最後に、本稿での考察から確認することができた点や指摘することができる点をまとめとして提示したい。

第1節 アングロ・サクソン諸法

表Iは、ウォーモルドの著作⁽¹³⁾と「初期のイングランド法」(<http://www.earlyenglishlaws.ac.uk>)⁽¹⁴⁾において取り上げられているアングロ・サクソン諸法を、ウォーモルドが用いた分類に従って、王法 (Royal Laws) を左欄に、それ以外の法 (Other Laws) を右欄に分けて、年代順に示したものである。表中では、ウォーモルドや「初期のイングランド法」の用法を参考にして、略号をまず示し、次いで丸括弧の中に、略号が表すアングロ・サクソン諸法の名を、英語表記のまま示した。なお、アングロ・サクソン時代の諸王が、実際に法典の草案を作成したとは考えられないが、⁽¹⁵⁾ 伝統と慣例に従って、王の名で法典名を表してある。また、慣例に従い「法典(code)」⁽¹⁶⁾ という表現を用いる。

⁽¹³⁾ Wormald, *Making of English Law*, pp. 112-118, Table 3.1

⁽¹⁴⁾ 「初期のイングランド法」は、1215年のマグナ・カルタまでの時代のイングランドのあらゆる法典 (legal codes)、命令 (edicts)、論考 (treatise) の新たな編集や翻訳をオンラインないし印刷によって公表するプロジェクトである。これは、ロンドン大学のInstitute of Historical Researchとロンドン大学キングスカレッジのDepartment of Digital Humanitiesの協力によって支えられている。2009年から2011年までの最初の3年間の事業は、イギリスの芸術・人文科学研究会議 (Arts and Humanities Research Council) の助成に基づいている。「初期のイングランド法」では、手書本を画像でも確認できる。次節以降でもこれを頻繁に参照した。

⁽¹⁵⁾ Richards, 'The Manuscript Contexts of the English Laws: Tradition and Innovation', p. 172.

⁽¹⁶⁾ 前掲註(4)の法典の説明に照らせば、アングロ・サクソン諸法典は「厳密な意味での法典では

ノルマン征服以後の時代については、アングロ・サクソン諸法を王が確認した文書等を王法として左欄に、それ以外のものを右欄に纏めてある。右欄には、アングロ・サクソン諸法を集めた法集成やそれに関する法的著作等が挙げられている。

第2節 ノルマン征服以前の手書本とその伝来状況

1 本節では、第1節の表Iで確認したアングロ・サクソン諸法が、1066年のノルマン征服より前の時代に由来する手書本によって伝来する場合を検討したい。そのような手書本はウォーモルドの研究を参考にすると、断片で残った手書本も含めるなら、12点現存する(後述の①から⑫を参照。⑬については後述)。彼はそれらを六つの類型に分けている。ここでは、概ねその分類に従いつつ、アングロ・サクソン諸法が、(1)年代記等と共に収録されている場合、(2)独立した数枚の獣皮紙に収録されている場合、(3)福音書や典礼書等と共に収録されている場合、(4)説教書等と共に収録されている場合、(5)教会法や贖罪規定書等と共に収録されている場合、そして(6)断片ないし失われた手書本に収録されている場合という六類型に分けて確認してみたい。

2 手書本については、まず、白ぬき数字の後に、略号、所蔵と分類番号、諸法の収録箇所、推定作成地、推定作成時期の順に情報を記し、次に、手書本の構成と収録されたアングロ・サクソン諸法とに言及する。収録されているアングロ・サクソン諸法の詳細は、表IIに示してある。表IIでは、表Iで用いた略号を用いている。

手書本は、いわゆる集合写本集として現存している場合が多く、本節の説明や、表IIにおいては、アングロ・サクソン諸法が収録された部分に関する情報のみを記している。つまり、最終的には一つの手書本に綴り合わされて今日我々が目にする手書本の形に合本されているとしても、アングロ・サクソン諸法が収録された部分とは別の時代に、或いは別の場所で作成されたと考えられる部分には言及していない。

なく、ただ慣行に従って法典と称されているに過ぎない」(直江、前掲論文、229-230頁)ことが分かるであろう。

表 I Anglo-Saxon Legal Texts

871 Alfred即位	AGu (Treaty of Alfred and Guthrum) Af (Alfred's <i>domboc</i>)	
899 Edward 'the Elder'即位	I Ew (Edward's first code) II Ew (Edward's second code)	
924 Æthelstan即位	I As (Æthelstan's tithe edict) As Alm (Æthelstan's Charity edict) II As (Æthelstan's Grately code) V As (Æthelstan's Exeter code) III-IV, VI As (Æthelstan's code) VI As 12 (Whittelbury modification of Thunderfield)	<i>Duns.</i> (<i>Dunsæte</i>)
939 Edmund即位	I-III Em (Edmund's Legislation)	<i>blas.</i> ('On Incendiaries')/ <i>Ord.</i> ('Ordel')
946 Eadred即位		<i>Wer.</i> ('Wergeld') App Agu ('Alfred-Guthrum Appendix') <i>Romscot</i> ('Rome-payment')
955 Eadwig即位		<i>Hu</i> (<i>Hundred</i> Ordinance)
959 Edger即位	II-III Eg (Edger's Andover code) IV Eg (Edger's <i>Wiltbordesstan</i> code)	<i>Index</i> (Judging) <i>Forf.</i> (<i>Forfang</i>)
978 Æthelred II即位	II Atr (Æthelred's teaty with Olaf etc.) IV Atr 5-9: 3 (Æthelred's coinage laws) I Atr (Æthelred's Woodstock code) III Atr (Æthelred's Wantage code) V-VI Atr (Law-making council at Ensham, 1008) VII Atr (Penitential edict at Bath) VIII Atr (Æthelred's 'eighth' code, 1014)	<i>Rect.</i> (Rights of People) <i>Swor.</i> (Oaths) II Atr 8-9: 4 ('II Æthelred Appendix') <i>Pax, Wal.</i> ('Peace', 'Corpse-robbery') EGu ('Peace of Edward and Guthrum') <i>Ger.</i> (The Reeve) <i>Gepyn.</i> etc. (Ranks of Men) <i>Grið</i> <i>Norðleod</i> (Northanbrian Law, wergeld) <i>Mirc.</i> (Mercian Law, wergeld)
1016 Cnut即位	Cn 1018 (Cnut's? Oxford code, 1018) Cn 1020 (Cnut's first letter to the English) I-II Cn (Cnut's Winchester code) Cn 1027 (Cnut's second letter to the English)	<i>að</i> (Mercian Oath) <i>Becwæð</i> (Bequeathing) <i>Wif.</i> (Marriage) Northu ('Northumbrian Priests' Law')
1042 Edward the Confessor即位		
1066 William I即位	Wl Lond (William's writ for London) Wl lad. (William's writ on Exculpation)	
1087 William II即位		<i>Inst Cn</i> (<i>Institutio Cnuti</i>) Wl Art (Articles of William)
1100 Henry I即位	C Hn Cor (Coronation Charter of Henry I) Hn mon (Henry's coinage writ)	<i>Q</i> (<i>Quadripartitus</i>) Hn (<i>Leges Henrici Primi</i>) <i>Cons Cn</i> (<i>Consiliatio Cnuti</i>) <i>Leis Wl</i> (<i>Leis Willelme</i>) <i>ECf</i> (<i>Leges Edwardi</i>)
1135 Stephen即位		
1154 Henry II即位		

P. Wormald, *The Making of English Law: King Alfred to the Twelfth Century*, Oxford, 1999, pp. 112-117, Table 3.1
および<http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/texts/index/?tp=ki> (accessed 2016/09/09) を参考に筆者作成。

なお、各手書本の説明の典拠は、手書本の推定作成時期の直後の註に記した（これは表IIの典拠でもある。また、表IIの★は、手書本の現物を閲覧調査済みの場合を示す。）。

3 手書本

(1) 年代記等と共に収録されている場合

① [E] Cambridge, Corpus Christi College, MS 173: fos. 33r-52v; Winchester (the s. x^{mid})⁽¹⁷⁾, Canterbury (after 1001; -c. 1070)⁽¹⁸⁾

この手書本は集合写本集であり、2部から成る。第1部 (fos. 1-56) は、ウィンチェスタで作成されたが、1070年頃までにカンタベリー司教座聖堂付属修道院たるクライスト・チャーチに移された⁽¹⁹⁾。この部分に、『アングロ・サクソン年代記』や教皇と司教のリストとともに、『アルフレッド王法典』および『イネ王法典』が含まれている。これらの法典は、930年代に『アングロ・サクソン年代記』に付加された可能性がある。ちなみに、第2部 (fos. 57-83) は、8世紀に由来する。

表II Anglo-Saxon Legal Texts in the Manuscripts

	①	②	③	④	⑤	⑥
MSS	E	Ot★	F★	A★	K★	Y
Laws	Af (33r-47r) Ine(47r-52v)	II As (48r-?) Af-Ine (?-53v)	IV Eg (185v-186v)	II-III Eg (3v-4v)	Sacr cor: Latin (9v-10r) Sacr cor: Latin (19r-19v) VI Atr : Latin (32r-35r) VI Atr : OE (35v-37r) VI Atr app (37v-38v)	Cn 1020 (160r-160v)

⁽¹⁷⁾ 第2節における手書本の推定作成時期は、ウォーモルドによる。「初期のイングランド法」が推定作成時期に言及している場合でそれがウォーモルドとは異なる場合には、それをウォーモルドの推定の後にセミコロンを挟んで記した。

⁽¹⁸⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/E/> (accessed 2016/09/09); M. Swan and O. Roberson, 'English additions to text of Anglo-Saxon Chronicle: Cambridge, Corpus Christi College, 173', in *English Manuscripts*, available at <http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/mss/EM.CCCC.173.htm> (accessed 2016/09/09); Wormald, pp. 163-172を参照。

⁽¹⁹⁾ ウォーモルドによれば、1001年以降に、「初期のイングランド法」によれば、1070年頃までにクライスト・チャーチに移されたとされている。

② [Ot] London, British Library, MS Cotton Otho B. xi : fos. 48r-53v; Winchester (1001x1015; 1001-1012)⁽²⁰⁾

この手書本は、1731年の火災で損傷を受けており、全体の一部の断片しか現存しないが、その内容は、1562年に作成されたコピー（後述の⑬ [Nw2] BL, Adittional 43703）から推定されている。これには、『アングロ・サクソン年代記』や教皇と司教のリスト等と共に、『エセルスタン第2法典』他（表II参照）が含まれている。⁽²¹⁾

（2）独立した数枚の獣皮紙に収録されている場合

③ [F] London, British Library, MS Cotton Nero E. i, Part II: fos. 185v-186v; Wocester (s. x/xi; the late 10th or early 11th c.)⁽²²⁾

この手書本には、『エドガー第4法典』が含まれている。この法典が含まれる第185葉裏から第186葉裏の部分は、今日ではこの手書本に合本されて現存しているが、元々は独立した部分であったと考えられている。この部分は、他の部分の獣皮紙よりもサイズが小さい。

before the Norman Conquest

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
G	D	C	O	Vr	Bu★	Nw2★
I As (86v-87v)	VII Atr (30)	IV Eg: Latin (216-222)	Að (418-419)	X Atr (75v)	Af-Ine (42r-42v)	II As (233r-236r, 265r)
I Em (87v)	Northu. (43-46)	IV Eg: OE (222-227)	Mirc (418)			Af (236v-249r)
II-III Eg (88r-89r)	II-III Eg (46-48)		Had (419-420)			Ine (249r-255v)
V Atr (89r-92v)	V Atr (48-51)					V As (265r-266r)
Grið (92v)	I As (53)					Iudex (266r-267v)
VIII Atr 1-5 (95v)	VIII Atr (93-96)					
Nor Grið (96v)	I Em (96-97)					
	Geþyn (101-102)					
	Norðl. (102)					
	Mirce (102)					
	Að (102)					
	Had (102-103)					
	Cn 1018 (126-130)					

⁽²⁰⁾ [Ot] については、<http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Ot/> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 172-181を、[Nw2]については、<http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Nw/> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, p. 165を参照。

⁽²¹⁾ Wormald, *Making of English Law*, p. 164.

⁽²²⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/F/> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp.164, 182-185を参照。

- ④ [A] (A) London, British Library, MS Harley 55: fos. 3v-4v; Wocester (s. xi¹)⁽²³⁾

この手書本の最初の4葉 (fos. 1-4) の中に、『エドガー第2法典』および『エドガー第3法典』が含まれている。最初の4葉は、11世紀初めに作成され、ウスターやウスター司教ウルフスタン (在位1002-16年) と関係がある⁽²⁴⁾。

(3) 福音書や典礼書等と共に収録されている場合

- ⑤ [K] London, British Library, MS Cotton Claudius A. iii: fos. 9v-10r, 19r-19v, 32r-38v; Wocester?, York? (s. x/xi-xi¹)⁽²⁵⁾

この手書本には、『戴冠式宣誓 (Sacr cor.)』や、ラテン語版と古英語版の『エセルレッド第6法典』他 (表IIを参照) が含まれている。17世紀のコットン卿のもとで、現在の手書本の構成に合本されたとみられており、元々は典礼書と関連があったとされている。

- ⑥ [Y] York Gospels: fos. 160r-160v; York (s. x/xi-1020x1023)⁽²⁶⁾

この手書本には、福音書やウスター司教ウルフスタンの説教集等と共に、『クヌート第1書簡』が含まれている。この手書本は、1000年頃にカンタベリーで作成された後に、1020年頃にヨークにもたらされたとされている。

(4) 説教集等と共に収録されている場合

- ⑦ [G] (B) London, British Library, MS Cotton Nero A. i (B): f. 86v-96v; Wocester?, York? (s. xiⁱⁿ)⁽²⁷⁾

この手書本には、福音書やウルフスタンの説教集等と共に、『エセルスタン第1法

⁽²³⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/A/> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp.164, 185-190を参照。

⁽²⁴⁾ なお、この手書本には、1150年頃に作成された『クヌート第1法典』および『クヌート第2法典』(I-II Cn, fos. 5r-13v) のコピーが合本されており、『クヌート第1法典』および『クヌート第2法典』は独立したパンフレットとして流布していたと考えられている。この部分を [A] (B) と表記し、後述する。

⁽²⁵⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/K/> (accessed 2016/09/09); http://hviewer.bl.uk/lamsHViewer/Default.aspx?mdark=ark:/81055/vdc_100000001246.0x000375 (accessed 2016/09/09)を参照。

⁽²⁶⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/y/> (accessed 2016/09/09); E. Treharne, 'Documents and Sermons: York, Minster Library, Additional 1', in *English Manuscripts*, available at <http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/mss/EM.YM.1.htm> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 195-197を参照。

⁽²⁷⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/G/> (accessed 2016/09/09); <http://>

典』他（表IIを参照）が含まれている。これまでの手書本の中で、最も多くのアングロ・サクソン諸法が含まれている。

⑧ [D] Cambridge, Corpus Christi College, MS 201: f. 30, 43-51, 53, 93-97, 101-103, 126-130; Winchester (s. xi⁽²⁸⁾med)

この手書本は三つの部分で構成されており、それらの部分は16世紀にカンタベリ大司教マシュー・パーカーによって合本された。11世紀半ばに由来するとされる第2部には、ウスター司教ウルフスタンの説教集と共に、複数のアングロ・サクソン諸法が収録されている。その数は、直前で紹介した⑦ [G] (B) よりも多い。

(5) 教会法や贖罪規定書等と共に収録されている場合

⑨ [C] Cambridge, Corpus Christi College, MS 265: 216-227, Worcester (s. xi⁽³⁰⁾med)

この手書本は、11世紀後半におそらくはウスターで作成された。これには、教会法や贖罪規定書等と共にラテン語版と古英語版の『エドガー第4法典』が含まれている。

⑩ [O] Cambridge, Corpus Christi College, MS 190: 418-420; Worcester/Exeter (s. xi-xi⁽³¹⁾med)

この手書本は、二つの部分から成るが、いずれも11世紀に作成されて、程なく合

searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS040-001102576&indx=2&reclids=IAMS040-001102576&recldxs=1&elementId=1&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&dscnt=0&frbg=&scp.scps=scope%3A%28BL%29&tab=local&dstmp=1473425185182&srt=rank&mode=Basic&&dum=true&v1(freeText0)=Cotton%20Nero%20A%20i&vid=IAMS_VU2/ (accessed 2016/09/09); *A Catalogue of the Manuscripts in the Cottonian Library, deposited in the British Museum*, 2 vols. 1802, vol.1, p. 201; Richards, 'The Manuscript Contexts of the English Laws: Tradition and Innovation', pp. 176-8; Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 198-199, 202-203.

(28) なお、これらの法典が含まれる部分より前の部分(f. 3-57)に、11世紀半ばに筆写された『クヌート第1法典』および『クヌート第2法典』(I-II Cn, f. 3r-41r)などが合本されていることについては、<http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/G/> (accessed 2016/09/09)を参照。この部分を[G] (A)と表記し、後述する。

(29) <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/D/> (accessed 2016/09/09); E. Treharne, 'Cambridge, Corpus Christi College, 201', in *English Manuscripts*, available at <http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/mss/EM.CCCC.201.htm> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 206-210を参照。

(30) <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/C/> (accessed 2016/09/09); H. Morgan and O. Roberson, 'Cambridge, Corpus Christi College, 265', in *English Manuscripts*, available at <http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/mss/EM.CCCC.265.htm> (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 211-213, 216-219を参照。

(31) <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/O/> (accessed 2016/09/09); E. Treharne, 'Cambridge, Corpus Christi College, 190', in *English Manuscripts*, available at <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/O/>

本された。この手書本には、教会法や贖罪規定書等とともに、複数のアングロ・サクソン諸法が収録されている（表IIを参照）。

（6）断片ないし失われた手書本に収録されている場合

これらの場合に該当する手書本には、⑪と⑫の2点がある。⑬は、前述の②で触れたように、火災で②が損傷を受ける前にその内容を筆写したコピーであるとされているので、ここに挙げておく。各手書本に収録されているアングロ・サクソン諸法については表IIを、現存手書本の伝来等に関しては各手書本の推定作成時期の直後に付した註を、参照されたい。

⑪ [Vr] Rome, Vatican Cod. Reg. lat. 946: fo. 75v; ? (s. xi)⁽³²⁾

⑫ [Bu] London, British Library, MS Burney 277: fo. 42r-42v; ? (s. xi)⁽³³⁾

⑬ [Nw2] London, British Library, MS Additional 43703: 233r-55r, 265r-67v; ? (1560s)⁽³⁴⁾

4 以上のように、ノルマン征服より前の時代に由来する手書本においては断片ないし失われた手書本に収録されている場合の⑪から⑬までの手書本を除きアングロ・サクソン諸法は、年代記、福音書、説教集、そして教会法や贖罪規定書と関連する文脈に配置されて収録されている。このことから推察されることとして、当時のアングロ・サクソン諸法の手書本が、裁判実務における利用を意図して作成されたとは思われないということである。⁽³⁵⁾

www.le.ac.uk/english/em1060to1220/mss/EM.CCCC.190.htm (accessed 2016/09/09); Wormald, *Making of English Law*, pp. 164, 220-224を参照。

⁽³²⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Vr/> (accessed 2016/09/09) では手書本の情報を得ることはできなかった。

⁽³³⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Bu/> (accessed 2016/09/09) を参照。

⁽³⁴⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Nw/> (accessed 2016/09/09) および [http://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS040-002056694&indx=3&recIds=IAMS040-002056694&recldxs=2&elementId=2&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&dscnt=0&frbg=&scp.scps=scope%3A%28BL%29&tab=local&dstmp=1473426045696&srt=rank&mode=Basic&&dum=true&v1\(freeText0\)=Additional%2043703&vid=IAMS_VU2](http://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS040-002056694&indx=3&recIds=IAMS040-002056694&recldxs=2&elementId=2&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&dscnt=0&frbg=&scp.scps=scope%3A%28BL%29&tab=local&dstmp=1473426045696&srt=rank&mode=Basic&&dum=true&v1(freeText0)=Additional%2043703&vid=IAMS_VU2) (accessed 2016/09/09) を参照。

⁽³⁵⁾ 森貴子「アングロ・サクソン期イングランドにおける王の法典の史的性格」：P. Wormald, *The Making of English Law*を素材として、『愛媛大学教育学部紀要』第59巻、2012年、255-262頁、特に259頁、および近藤佳代「アングロ・サクソン前期、ウェセックスのイネ王と教会の関係—『イネ王法』における王の視点—」『人間文化創成科学論叢』第13巻、2011年、79-86頁の指摘も参照。

第3節 ノルマン征服以降の手書本とその伝来状況 一「法全書」と「パンフレット」一

1 ノルマン征服以後の時代に由来する手書本は、征服より前の時期に由来する手書本よりかなり多く、中でも12世紀に由来する手書本の多さは際立っていると言つてよい。この点を確認できるよう、本節と次節では、12世紀に由来するものに網掛けを施した。

本節の3では、まず、アングロ・サクソン諸法を伝える手書本のうち、ノルマン征服以後に由来する手書本の中で、ウォーモルドが「法全書(legal encyclopaedias)」と特徴づけて分類したものを紹介する。彼は「法だけを含む」⁽³⁶⁾手書本を「法全書」と位置づけて全部で12点(以下の①から⑫)⁽³⁷⁾取り上げているわけだが、以下では、第1に、それらを法集成として紹介したい。その際、まず、単独の手書本で伝来している法集成を紹介し(1)、次に、複数の手書本で伝来している法集成を紹介する(2)。後者は、リーパーマンによって『クアドリパルティートゥス(Quadripartitus)』と称された法集成である。

第2に、ウォーモルドが、「パンフレット」の形で持ち運ばれた法ではないかと考えているもの(以下の⑬)を紹介する(3)。

2 以下の3では、まず手書本の情報を紹介する。手書本については、その中に含まれる法集成の作成推定時期が古い順に取り上げる。その際、丸中数字の後に、手書本の略号、所蔵と分類番号、法集成の収録箇所、使用言語、推定作成地、推定作成時期、サイズ、その他の順で紹介する。それらの説明は、ウォーモルドの著作⁽³⁸⁾の他に、後述の表Ⅲと表Ⅳに記した典拠(Reference)に基づいている。

次に、各手書本のほとんどが集合写本集であって、一つの手書本の全体が法集成というわけではないことを踏まえ、表Ⅲを用いながら、一つの手書本が幾つの部分(ないし本)⁽³⁹⁾を綴り合わせた合本なのかを可能な限り示す。表Ⅲでは英語を用い、

⁽³⁶⁾ Wormald, *Making of English Law*, p. 224.

⁽³⁷⁾ Wormald, *Making of English Law*, pp. 165, 224-253を参照。

⁽³⁸⁾ Wormald, *Making of English Law*, pp. 224-255.

葉数や折り丁 (Foliation or Quires etc.)、主たる内容 (Main Contents) の表現は典拠にある表記に倣った。なお、手書本の現物を閲覧調査済みの場合には★を、未閲覧の場合には☆を付けてある。

その後、表IVを用いながら、各手書本に収録されたアングロ・サクソン諸法について簡潔に言及する。表IVは、各手書本の中の法集成の部分に収録されているアングロ・サクソン諸法を、表IV中に示した典拠とイギリスの図書館での手書本の閲覧調査結果とに基づいて作成したものである。表IVでは、収録されているアングロ・サクソン諸法の順番を手書本相互で比較しやすいよう、後代に作成された法集成では、収録されているアングロ・サクソン諸法が連続している場合でも、行を空けてある。その場合でも、アングロ・サクソン諸法が連続して収録されているかどうかを確認できるよう、アングロ・サクソン諸法の横の () には収録されている箇所をフォリオ (folio) 番号で示しておいた。

3 手書本

(1) 単独の手書本で伝来している法集成

- ① [G] (A) BL, Cotton MS Nero A. i ; fos. 3-57; Old English and Latin; Canterbury?, York or Wocester?; the middle of the 11th c.; the early 11th c.; a small size (168×103mm); the earliest extant English law book

この手書本は集合写本集であり、⑦として紹介した手書本である。手書本の全体は5部に分けることができる(表IIIを参照)。ノルマン征服より前に作成された部分を含む第4部 (fos. 70r-177v) には、前述の⑦で紹介したアングロ・サクソン諸法が含まれている。第2部は、11世紀半ばないし11世紀初めの作とされるため、ノルマン征服の前の時期に由来する可能性もないわけではない。第4と第2の部分は、1580年までに合本されたと考えられている。第2部に含まれるアングロ・サクソン

⁽³⁹⁾ 表IIIでは、各部分(本)の推定作成時期が典拠に示されている場合には、その時期を示しておいた。

⁽⁴⁰⁾ 作成時期を、ウォーモルドは11世紀半ば、「初期のイングランド法」は11世紀初めと推定している。

⁽⁴¹⁾ Richards, 'The Manuscript Contexts of the English Laws: Tradition and Innovation', p. 176; N. R. Ker, *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* (Oxford: Clarendon Press, 1957; repr. 1990), p. 215. なお、Kerのカatalogは、他の手書本についても、記載がある場合は参照した。

諸法の詳細は、表IVを参照されたい。「法全書」と位置づけられている手書本としては、最も古いもので、携帯できるポケットサイズの手書本である。汚れており、シミも多い。

- ② [B] Cambridge, Corpus Christi College 383; Old English; fos. 10r-30v, 38r-69r; St Paul's, London; from the late 11th c. to the 12th c.; a small size (187⁽⁴²⁾ mm×116mm)

この手書本は、「法全書」の中では①に次いで古い。全体は5部に分けることができる。第1・3・5部を除く、第2部(10r-30v)と第4部(38r-69v)が12世紀に作成されたものと考えられている(表III参照)。第2部と第4部に含まれているアングロ・サクソン諸法は、①よりもだいぶ多い。ロンドン司教座聖堂であるセント・ポールに関係があるとされている。携帯可能な小さなサイズである。

- ③ [H] Medway Archive and Local Studies Centre, Strood, England, MS DRc/R1 (It was Rochester, Cathedral MS. A. 3. 5); fos. 1-118; Old English and Latin; Rochester Cathdral; the early 12th c.; a small size (225-23×150-5mm)⁽⁴³⁾

この手書本は、テクストゥス・ロフェンシス (Textus Roffensis) として一般に知られる手書本で、ロチェスタ司教アーヌルフ (Ernulf) の時代に編集されたのではないかと考えられている。全体は、2部に分けることができる。前半部 (fos. 1-118) にアングロ・サクソン諸法が収録されており、後半部 (fos. 119-235r) はロチェスタ司教座聖堂付属修道院のカーチュラリーである。前半部と後半部は、元々、独立した本であり、二つの本は14世紀に一つの本として綴じられたとされている。折り丁 (Quire) の調査に基づく研究によれば、第1部を構成する14の折り丁は差し替え等がかなり激しく行なわれたようで、現在の手書本において「イングランド人の王国の諸法集がここに始まる (Incipiunt quaedam instituta de legibus regum Anglorum)」と書かれている fo. 58が位置する7番目の折り丁は、二つの本が合本さ

⁽⁴²⁾ 本手書本に関する研究としては、例えば、註(2)で紹介したGobbitt, 'Audience and Amendment of Cambridge, Corpus Christi College 383 in the First Half of the Twelfth Century'; Gobbitt, 'Miniaturung as Emendation: I-II Cnut in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383'; Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon Legal Texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383'がある。

⁽⁴³⁾ 本手書本に関する最近の研究として、註(2)で紹介したO'Brien and Bombi eds, *Textus Roffensis: Laws, Language, and Libraries in Early Medieval England*がある。

表III Contents of

MS	Lexica Rollensis					Quedeparcetia		
	CR*	BR*	HR*	HR*	HR*	HR*		
Position of Quire etc.	See: I 180; I 114 (1; early modern calligraph) I 112-2) (S.OT.3.52) - 12 (ff. 58-69) + 108 (ff. 70-177) + 3 (ff. 178-180)	fol. 1-9 A-G (entries 9), s. viii fol. 10-30. 16-28 (entries 63, 35, 36, 37) fol. 31-37: 31/6 (words 8-10), s. xvi fol. 38-69: 49-52, 64 (3 and 6 are singletons), 73-72 and 6 are singletons), s. xviii fol. 70-72: C (three additional folios), s. xvi	Fols 1-236 are parchment fragments of the date of binding. Fols 4-6 are very poor medieval parchment. Folycast. Collation of part A (104v-110r); ff. 24, 25 + 2 letters after 2 (85v, 12, 13), 38, 40; 2 + 4 (104v after 2) (86, 32), 53, 10/2 + 38, 322 = 1 leaf after (1, 1 and 1) leaf after (1, 18, 82, 109, 114) which are probably blank, after fol. 100, 128 wants a leaf fol. 105, the leaf was scribbled in a wax seal (86, 109), 138, 141. There is mainly no chapter. 86, 86, 166 and 181 are supply leaves, s. viii, and 86s 177-80, 193-4, 197, 201-2, 213, 217, 220, 236-5 are additions in the manuscript, mostly of a. xviii. Note that, according to Wormald, most of the entries are not recombined, as a result of very careful design (1959, p. 347).	fol. 111: 175, 111 (ff. 111-112); I (very modern endpapers) 114 (ff. 2-15) + 14 (ff. 16-29) + 41 (ff. 30-70) + 34 (ff. 71-90) + 16 (ff. 91-110) + 14 (ff. 111-29) + 6 (ff. 120-125) + 36 (ff. 136-164) + 13 (ff. 165-174) + 16, 175)				
Main Contents	1-2v (1st quarter of the 10th century)	Entry modern index (A-6)	1-9v	1-100v Anglo-Saxon law codes, including <i>Canons</i> , <i>Canons</i> (138-201)	2-18v (1st half of the 10th century)	ff. 2-11r: <i>Diocesis de primo Saeculo</i> written in the 11th century; ff. 12-29: <i>Ante of Pope Paschal II</i> (d. 1118), ff. 43v-14r: <i>Concordat of Worms</i> , <i>Placitum de Dapibus</i> (Walther 451); ff. 14-45v: <i>Hildesheim of Le Mans</i> , <i>De sacra Trinitate</i> (Walther 83).		
	30-52v (3rd quarter of the 11th century)	Anglo-Saxon law codes	10-30a	Anglo-Saxon law codes	101-2v	Lists of Kings, Saints, and Bishops: List of Kings	16-30v (2nd half of the 12th century)	<i>Chronica from Nash</i> in the <i>Possessory of Frankia</i> (814-840)
	58-69v (2nd half of the 14th century)	Anglo-Saxon law code <i>Aldred</i> and the <i>Hand of John</i> (entry at 1603)	31-37v	102-104v	Lists of Kings, Saints, and Bishops: West-Saxon Genealogy	30-70v (4th quarter of the 11th century, (a) quarter of the 12th century)	71-90v (4th quarter of the 12th century)	A version of the Anglo-Saxon Chronicle written in the Old English and Latin, known as the 'P' text of the Anglo-Saxon Chronicle
	70-177v (1st quarter of the 14th century)	Wulfstan of York, <i> Institutes of Polity</i> (70v-76v, 97v-99v, 102v-105v, 109v-120v), <i> Wulfstan of York, sermons</i> (70v-89v, 110v-116v), <i> including Sermon Ingi ad Anglos</i> (117v-119v), <i> miscellanies</i> , <i> additions</i> (83v, 96v, 105v-108v, 120v-121v, 148v-160v, 167v, 174v-177v), <i> including an intercalary AD 1106-1112 (120v, 121v)</i> , <i> Anglo-Saxon law codes</i> (4: <i> Beulfstan</i> (88v-87v), <i> Edmund</i> (87v-96v), <i> 100 Edgar</i> (88v-89v-96v), <i> V. Athabard</i> (89v-92v, 116v-119v), <i> law code in the style of Wulfstan of York</i> (92v-93v, 96v, 98v, 99v, 100v, 101v, 102v-105v, 109v-120v); <i> excerpts on the role of a bishop</i> (172v-173v); <i> imperfectly transcriptions</i> <i> Higbert</i> (127v-148v); <i> list recollections</i> ; <i> excerpts on canon law</i> (149v-174v)	105-16v	Anglo-Saxon law codes	105-16v	Lists of Kings, Saints, and Bishops: Lists of Popes, Emperors, Patriarchs and Legats, Antipopes and Misdepts	171-294v (4th quarter of the 12th century)	<i>Robert le Torigni's chronicle for the year 1153-1179</i>
	178-180v (1st quarter of the 17th century)	Entry modern index (8-9)	70-72v	110v	Lists of names, (a) 'significat quatuor sermones', (b) of popes responsible for introducing new forms of names to the liturgy, (c) 'septem archiepiscopatum'	85-110v (1st half of the 12th century)	<i>Quadragesima</i>	
				119-222v	<i> Rochester cathedral, Cantuari</i>	111-110v (2nd half of the 12th century)	ff. 111-119: <i>Theory of Turingdun, De conatibus mundi</i> (<i> Historia Anglorum</i> , book vi); <i> 119v: a conciliar charter of King Henry of England</i> (1100-1155) (imperfect)	
				222v-v	Note of the number of masses etc. to be recited for members of English and Norman religious houses in conformity with <i> Rochester</i>	120v-125v (4th century, 2nd half of the 15th century)	ff. 120v-125v: <i> list of Welsh names in Middle Welsh</i> , copied in the 2nd half of the 15th century; <i> 121r: Act of Edward, Genealogia regum Anglorum</i> (generally copied in the 6th quarter of the 13th century or 1st quarter of the 14th century; ff. 122v-124r: <i> genealogical chronicle of the dates of Normandy and kings of England</i> , copied in the late 13th century or 2nd half of the 14th century; <i> 124v: memorandum of the children of King Edward II of England</i> (original: 1307-1374), copied in the late 13th century or 2nd half of the 14th century; <i> 125v: memorandum of the ladies English under King Edward III of England</i> (1327-1377), copied in the late 13th century or 2nd half of the 14th century.	
					126v-164v (4th quarter of the 14th century)	ff. 126v-164v: the <i> Glosarium Clementis</i> , from AD 681 to the abbacy of <i> Walter Proussier</i> (d. 1472); <i> ff. 145v-164v: record of grants to St. Mary's Abbey, Clonsilla</i>		
					162v-174v (4th 15th century)	ff. 162v: <i> diagram of the Scaucus Dei</i> (<i> uragulum</i> in Latin and <i> Kralike Trgahin</i> , ff. 162v-169v: <i> an obituary in Latin and Middle English</i> ; <i> ff. 169v-174v: a calendar</i>		
					175v-(1st half of the 17th century)	A letter from <i> William Spring</i> , acknowledging receipt of a previous letter and instruction, with notes in another hand written on the back and along the side.		

the Manuscripts

Quadrupartius		Quadrupartius		Quadrupartius		Quadrupartius					
B*		B*		7*		M*					
12L, 1-4, i-vi f. ; mt. 5, iv f. ; iv 77 ; mt. 6, 7, 1 f. ; 14		Vellum and Paper: ff. a 173; gatherings, 1-10, 16th cent.; 16 (3, 4 paper), 16 (3, 4 paper), 16 f. (paper)		1 (f. 1: early modern endleaf) + 218 (ff. 2-219)							
J ; mt. 8, 9, 10, i-vi f. ; vii 2 ; mt. 11-14, 1 f. 6, 11, iii f. ; mt. 15, 16, i f. 7.		1r (16th cent.)		2r-87r							
1r		Summa Decretum by Gratianus		v. vi (1623)		William Camden, <i>Antiquary</i> ; Claerborne King of Arms					
46v		Fragments from a collection of theological sermons, representing the theological system of the 12th cent. Paris schools		1r (16th cent.)		Trinity Arms in silhouette of Abp Matthew Parker					
50r		Text of <i>documenta contralia</i> from the Summa Sententiarum of Hugob de S. Victor		1r (1837)		Bookplates and book-edges: Thomas William Clark, 1st Earl of Leicester of Holkham; Bookplates (each crest of Lord Leicester of Holkham)					
56v		Fragments from S. Ambrose and others		12v-15v (late 18th cent.)		Poetry J.A.F.N. Hexameters on English sovereignty from Alfred to Elizabeth I					
57r		Commentary on certain portions (port. II, canon xxvii-xxviii and canon xvi) of Gratian's Decretum		17v-105v (the first quarter of the 12th c., second 13th cent.)		Quadrupartius					
62v		Vobis cathos calathos hereticos clericos hereticos agobatos, hereticos praeterit communitatis vobiscum: a twelfth century reference to the Decretum		105v-116v (early 13th cent.)		Pseudo- <i>Ulpianus</i> : <i>De Edictis</i>					
97v		Decretals of Alexander III		117v-857v (16th cent.)		The Laws of Edgar (ff. 117-121v); 394f. 'Quoniam amper' of John XIII to Edgar, 971 (ff. 132-142v); Account of the Council of Winchester, 1076 (ff. 125-126v); <i>Stank</i> (1280-1290); Letter <i>Indultus</i> to Lucius, King of Britain (ff. 129v-131); <i>Shall</i> 'Legationes sine' of Pandulf fitz Henry I, 1101 (ff. 132-136v); Letter from Innocent II to Henry I, 1113 (136v-137v); Letter <i>Edward</i> (ff. 138a-bv); <i>Mass</i> (140v); Laws of William I (Laws <i>Willelmi</i>) (ff. 141v-144b) <i>French</i> ; Laws of Edward the Confessor (Laws <i>Edwardi Confessoris</i> & 'Constancia <i>Cuncti</i> ') (144v-157v) Latin.		176v-181v		Maribel, <i>De lapidibus</i>	
102v-161v		Quadrupartius		158-161 (16th cent. Lat.)		Law Of ENGLAND: Glossary of Anglo-Saxon law terms					
166v		'De septem vitiis mundi'									
167v		Anecdote of Scipio									
168v		Fragments (the preceding leaves being lost) of the <i>missa</i> or <i>missae</i>									
168v		Poem (316 elegiac couplets) on the circumcisions of the Mass									
181v		Text on the crown of the Mass by Odo, Bishop of Cambrai 1193-1173									
195v		Form of <i>quis</i> . <i>Forma super canonicis excommunicatis</i>									
199v		Commentary on <i>Dalmis</i> i-viii.									
207v		Statistical poem in nine rhyming quatrains									

Reference	<p>http://manchester.libraries.libweb.ox.ac.uk/jspui/bitstream/10076/10883/1/AM5010-00102376%28Jan%20to%20Feb%2014%29.pdf</p> <p>Manuscript, available at http://www.e-ic.uk/eng/libweb/10076/10883/1/AM5010-00102376%28Jan%20to%20Feb%2014%29.pdf (accessed 2016/09/08)</p> <p>https://www.ox.ac.uk/jspui/bitstream/10076/10883/1/AM5010-00102376%28Jan%20to%20Feb%2014%29.pdf (accessed 2016/09/08)</p>	<p>T. Cobbin, <i>Law, cockat and related notes</i>, Cambridge: Copeys Christ College, 1837, in <i>English</i></p> <p>E. Ybarra, <i>Texos Rollenss</i>, Rochester: Calicut Library, A. 3. 2; in <i>English Manuscripts</i>, available at http://www.e-ic.uk/eng/libweb/10076/10883/1/AM5010-00102376%28Jan%20to%20Feb%2014%29.pdf (accessed 2016/09/08)</p> <p>R. James, <i>A Descriptive Catalogue of the Manuscripts in the Library of Corpus Christi College, Cambridge</i>, 2 1990, p. 447. <i>Vol. 1</i>, Cambridge, 1912, vol. II, pp. 238-1; N. R. Ker, <i>Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon</i>, Oxford, 1937, repr., with Supplement, 1990, pp. 119-12.</p> <p><i>A Catalogue of the Manuscripts in the Cottonian Library, deposited in the British Museum</i>, 2 vols. 1802, vol. I, p. 201.</p> <p>N. S. Ker, <i>Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon</i>, Oxford, 1937, repr., with Supplement, 1990, pp. 119-12.</p> <p><i>A Catalogue of the Manuscripts in the Cottonian Library, deposited in the British Museum</i>, 2 vols. 1802, vol. I, p. 973.</p>
-----------	---	--

* 下巻の巻末頁に、この書籍の成立に、フランス・サン・ジャンの騎士が関与したと記述している。 (Reference in *Quere* etc., 中がイタリアに、その下の方のリストを参照)

```

http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/
http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/
http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/
http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/ http://www.bham.ac.uk/~primo_1@nry/f/bsweb/actio/

```

C. S. Warren and J. P. Glazier, *Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and King's Collection in the British Museum*, 1921, vol. 1, pp. 343-344.

The *British Library Catalogue of Additions to the Manuscript 1556-1955: Part I: Proscriptions*, The British Library, 2001, pp.69-71.

表IV Anglo-Saxon Legal Texts in the Manuscripts

MS	Textus Roffensis			Quadripartitus	Quadripartitus	Quadripartitus
	G★	B★	H★	Dm★	M★	R★
Laws	I-II Cn (3r-41r)	Hu (10r-11r) Forf (10r)	Abt (1r-3v) Hl (3v-5r) Wi (5r-6v) Had. (7r-v)	Dedic. (95r- Argm. I-II Cn (97r-107r) Af (107r-110v)	Ine (46r-49v) I As (49v) As Alm (49v-50r) II As (50r-52v)	Argm. 32 I-II Cn (103r-118v) Af (103v-130v) Ine (130v-136v) I As (136v-137r) II As (137r-140v) As Alm (137r-137v) Ord. (140v-141v) Episc. (?-143r) Norðl. (143r-143v) Gehyn. (143v-144r) Mirc. (144r) að (144v) Had. (144v-145r) Bias. (145r) Forf. (145r-145v) Hu. (145v-146r) VI As Latin (146r-147r) VI As (147r-151v) EGu (151v-152r) II Em (152r-153r) Swcr. (153r-153v) WiF. (153v-154v) Wcr. (154v-155r) III Atr (155r-156v) Pax (156v) Wal. 156v) IV Atr a (156v-157v) IV Atr b (157v-158v) II Atr (158r-159r) II Atr app. (159v-160v) Dun. 160v-162r) Iudex (162r-163r)
	II-III Eg (42r-44v) Af (45r-48r) Romscot (48r) Iudex (?-?) AF-Ine (51r-57v)	I Atr (11r-12r) AGu (12v) Egu (13r-14v) II As (14v-15v) Af (16r-23r) Ine (23r-30v) I-II Cn (38r-52v) I-II Ew (52v-54v) I Em (54v-55r) II Em (55r-56r) Swcr. (56r-57r) AGu (57r-57v) WiF. (57v-58v) Wer. (58v-59r) Becwæð (59r-59v) II Atr (59v-61r) II Atr app (61r-62r) Dun. (62r-63r) Rect. (63v-66v) RSP+Ger (63v-69r)	Genral. list (7v-8v) Af (9r-24v) Ine (24v-31v) Ord. (31r-32v) Wal. (32v) II As (32v-37r) V As (37r-38r) Pax (38r) Mirc.(38v-39v) EGu (40r-41v) Wer. (41v-42r) I-II Ew 1 (42r-43r) I-II Ew 2 (43r-44r) I Em (44r-45r) II Em (45r-46r) I Atr (46r-47r) WI lad (47r-47v) III Atr (48r-49v) Iud. Dei (49v-57r) Inst Cn (58r-80r) WI Art (80r-81v) Exc. Decr. Pont. (81v-87r) VI As (88r-92v) VI As 12 (92v-93r) Gedyncæo (93r-93v) Norðl. (93v-94r) Wer. (93v-94r) WiF. (94v-95r) Charm (95r) Becwæð (95r-95v) C Hn cor (96r-97v) Excom. VIII (98r-99v) Excom. IX (99v-100r)			
						Rect. (163r-166r) Wil lad (166r-166v)
						C Hn cor (81r-82v)
						Hn Com (84r-84v) [Tr. Winch.] (85-86)

after the Norman Conquest

Quadrupartitus	Quadrupartitus	Quadrupartitus	Instituta Cnuti		Consiliatio Cnuti	Leis Willelme
Hk★	T★	Rs★	A★	Di★, H★, La★, RI★, T★	Hr★, Cb★	S★, Hk★
[Argum.]	Argum. (89r-)	<i>Geographical</i>				
I-II Cn (17r-34r)	I-II Cn (91r-105v)		I-II Cn	I-II Cn	I-II Cn	I-II Cn
Af (34r-47v)	Af (105v-115v)			Af-fine	Hu.	Wl Art.
Ine (47v-55r)	Ine (115v-121r)	Ine (4v-9v)		Gephy.	Bras.	Wer.
I As (55v-55v)	I As (121r)	Bias. (9v)		Norðl.	Forf.	Mirc.
As Alm (55v-56r)	II As (121r-121v)	Forf. (9v-10r)		Mirc.	VIII Atr	Af
II As (56r-60v)	As Alm (121r-121v)	Hu. (10r-10v)		ad	etc.	etc.
		<i>Historical</i>		Had.		
Epsc. (60v-61v)	Epsc. (-125c)	Af (11r-17v)		etc.		
Norðl. (61v-62r)	Norðl. (125r-125v)	AGu (17v-18r)				
		App. AGu (18r-18v)				
Mirc. (62r)	Mirc. (125v)	EGu (18v-20r)				
ad (62r)	ad (125v)	<i>Historical</i>				
Had. (62r-63r)	Had. (125v-126r)	I As (21r-21v)				
Bias. (63r)	Bias. (126r-126v)	II As (21v-25r)				
Forf. 63r-63v)	Forf. (126v)	As Alm (21v)				
Hu. (63v-64v)	Hu. (126v-127r)	Episc.				
IV As Latin (64v-66r)	IV As Latin (127r-128r)	Norðl. (26r-26v)				
V As (66r-67r)	V As (128r-128v)	Mirc. (26v-27r)				
III As (67r-68r)	III As (128v-129v)	ad (26v-27r)				
VI As 68v-72v)	VI As (129v-132v)	Had. (27r)				
		IV As Latin (27v-28r)				
Ord. (72v-73r)	Ord. (133r-133v)	V As (28v-29r)				
		III As (29v-29v)				
I Atr (73r-74v)		VI As (30r-33v)				
III Atr (74v-76v)		Ord. (33v-34r)				
Pax (76v)		<i>Historical</i>				
Wal. (76v)		I-II Cn (35r-51r)				
IV Atr a (76v-77v)		<i>Historical</i>				
IV Atr b (77v-78r)						
II Atr (78v-79v)						
II Atr app (79v-80v)						
Duns. (80v-82z)						
VII Atr. (82r-83v)						
Index (83v-84v)						
II-III Eg (84v-86r)						
AGu (86r-87r)	AGu (133v)					
App AGu (87r-87v)	App AGu (133v-134r)					
EGu (88r-89v)	EGu (134r-135v)					
I Ew (89v-90v)	I EW (135v-136c)					
II Ew (90v-91v)	II Ew (136r-136v)					
I Em (91v-92r)	I Em (136v-137r)					
III Em 92r-93r)						
II Em (93r-94r)	II Em (137r-137v)					
Swer. (94r-94v)	Swer. (137v-138v)					
Wif. (94v-95r)	Wif. (138v-139r)					
Wer. (95r-95v)	Wer. (139r)					
	I Atr (139r-140r)					
	III Atr (140r-141r)					
	Pax (141r)					
	Wal. (141r)					
	IV Atr a (141r-142r)					
	IV Atr b (142r-142v)					
	II Atr (142v-143v)					
	Duns. (144r-145r)					
	VII Atr (145r)					
	II-II Em (146v-147v)					
	III Em (147v-148v)					
Wl iad (95v-95v)	Wl iad (148v)					
	Wl Art. (148v-149v)					
Gephy. (96r-97r)	Gephy. (149v-150r)	<i>Wl Art. (52r-54r)</i>				
Rect. (97r-100r)	Rect. (150r-152r)	<i>ECf 4 (54r-74r)</i>				
		<i>Geneal. Duc. Norm.</i>				
? (100r-104v)	Rraef.	<i>Historical</i>				
	C Hn cor (153r-154v)	Hn (76-127v)				
Cn Com (104v-105r)	? (-160r)	C Hn cor (76v-78r)				
[Ulpianus] (105r-116v)	Hn Com (160r)	<i>Hn Lond (78r-79r)</i>				
[Leis W] (141r-144v)	[Inst Cii] (160v-174v)	<i>St cor (128r)</i>				
[ECf2] (144v-157v)		<i>Hn 2 Cor (129v-130r)</i>				

Reference	http://www.earlyengishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/G/ (accessed 2016/09/08)	http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/B/ (accessed 2016/09/08)	http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/H/ (accessed 2016/09/08)	http://www.earlyengishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Dm/ (accessed 2016/09/08)	http://www.earlyengishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/M/ (accessed 2016/09/08)	http://www.earlyengishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/R/ (accessed 2016/09/08)
	T. Gobbit, 'Law-codes and related texts: Cambridge, Corpus Christi College, 383', in <i>English Manuscripts</i> , available at http://www.le.ac.uk/english/cm106/ro1220/mss/EM.RCL.htm#EM.RCL-decoDese (accessed 2016/09/08)	E. Treharne, 'Textus Roffensis: Rochester, Cathedral Library, A. 3. 5.', in <i>English Manuscripts</i> , available at http://www.le.ac.uk/english/cm106/ro1220/mss/EM.RCL.htm#EM.RCL-decoDese (accessed 2016/09/08)				Wormald, <i>Making of English Law</i> , pp. 240-1.

Talic: not in original collection; []: by other scrib(s). See Wormald, *Making of English Law*, pp. 240-1.

<p>http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/HK (accessed 2016/09/08)</p>	<p>http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Ts (accessed 2016/09/08)</p>	<p>http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/Rs/ (accessed 2016/09/09)</p>	<p>B. O'Brien, 'The <i>Instituta Cnuti</i> and the Translation of English Law', <i>Anglo-Norman Studies</i>, XXV, 2002, pp.177-197, pp. 177-8.</p> <p>F. Liebermann, <i>On the Instituta Cnuti Aliorum Regum Anglorum</i>, Transactions of the Royal Historical Society, vol. 7, 1893, pp. 77-107, p. 81 and n.4.</p>	<p>http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/texts/leis-w1/ (accessed 2016/09/09)</p>	<p>http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/texts/leis-w2/ (accessed 2016/09/09)</p>
<p>Wormald, <i>Making of English Law</i>, pp. 240-1.</p>		<p>Wormald, <i>Making of English Law</i>, pp. 240-1.</p>			

れる前には、独立した本の先頭にあったものと考えられている。⁽⁴⁴⁾

(2) 『クアドリパルティートゥス (Quadripartitus)⁽⁴⁵⁾』

『クアドリパルティートゥス』という作品は、ヘンリ1世治世(在位1110-35年)のおそらく1110年頃に作成された作者不詳の法集成である。ノルマン征服より前の法テキストが集められ、それらがラテン語に訳してある。「四部書」を意味する『クアドリパルティートゥス』という名称は、この作品を19世紀に編集したリーバーマンが用いて以降、我々研究者に用いられ続けている。これは、『クアドリパルティートゥス』の序論の一つである『アーギュメントゥム (Argumentum)』で、作品の当初の目標が4部を作成することであると述べてられていることに一因があるとされるのだが、結果としては2部だけが作成されたに過ぎないため、誤解を招く呼称となっていることが指摘されているところである。⁽⁴⁷⁾

この作品を収めている手書本のうち12世紀に作成された可能性があるものが5点ある。現存する手書本は全て作品の草稿版のコピーであり、完成版のオリジナルまたはコピーは現存しないとされている。草稿を年代の古い順に並べるなら、後述の「ロンドン・コレクション」の⑨ [Rs]、⑩ [K2]、⑪ [Co]、そして⑫ [Or] が初期の草稿であり、その後⑬ [R]、次に⑭ [Dm]、その後⑮ [T] と続き、最後に⑯ [M] と⑰ [Hk] という順番になるという。⁽⁴⁸⁾

⑭ [Dm] London, British Library, MS Cotton Domitian VIII, fos. 95r-110v; Latin; ?; the first quarter of the 12th c., [a small size (210×170mm)].

この手書本は集合写本集である。現在の手書本に合本されている各部分の内容に

⁽⁴⁴⁾ 鶴島博和「Textus Roffensisの構成—古文書学的視点から—」『熊本大学教育学部紀要、人文科学』第41号、1992年、1-38頁、特に11-12頁を参照。

⁽⁴⁵⁾ 本作品についての比較的最近の研究としては、例えば、P. Wormald, 'Quadripartitus', in G. Garnett and J. Hudson eds., *Law and Government in Medieval England and Normandy: Essays in Honour of Sir James Holt*, Cambridge, 1994; R. Shape, 'The Dating of Quadripartitus Again', in S. Jurasinski, L. Oliver and A. Robin, *English Law before Magna Carta: Felix Liebermann and 'Die Gesetze der Anglesachsen'*, Leiden, 2010 pp. 81-93がある。

⁽⁴⁶⁾ F. Liebermann ed., *Quadripartitus: ein englisches Rechtsbuch von 1114*, 1892, pp. 5-6. 本書は、<https://archive.org/details/quadripartitusei00liebuoft> および https://books.google.co.jp/books?id=t-cKAAAYAAJ&pg=RA1-PR1&hl=ja&source=gbs_selected_pages&cad=2#v=onepage&q&f=false (accessed 2016/09/06) でも閲覧可能である。

⁽⁴⁷⁾ Wormald, 'Quadripartitus', pp. 5-6; O'Brien, 'An English Book of Laws from the Time of Granvill', p. 55.

⁽⁴⁸⁾ Wormald, *Making of English Law*, p. 243.

については、表IIIを参照されたい。『クアドリパルティートゥス』が収録されている部分 (fos. 95r-110v) は、12世紀前半に作成された。これは、『クアドリパルティートゥス』として知られる法集成を伝える現存の手書本の中で、最古のものである。全ての序論の部分が残っているが、残りの部分は不完全である。表IVにあるように、収録されているアングロ・サクソン諸法は少ない。携帯可能な小さなサイズである。

- ⑤ [M] Manchester, John Rylands University Library, MS Lat. 420, fos. 46r-84v; Latin ;?; the second quarter of the 12th c.

この手書本は、現時点では現物を調査できておらず、表IIIでは詳細を掲載していないが、「初期のイングランド法」の情報によれば、第46葉表から第84葉裏(46r-84v)に『クアドリパルティートゥス』が収録されている。最初の20葉は失われており、fos. 21-61までの部分には16世紀に、fos. 46-87までの部分には17世紀にフォリオ番号が振られている。法集成の部分は12世紀後半に作成されたものとされているが、fos. 85-86には、後で別の筆跡で付け加えられた1153年のウィンチェスタ協定がある。収録されているアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。

- ⑥ [R] London, British Library, MS Royal 11 B.II, fos. 103r-166v ; Latin; Worcester; the third quarter of the 12th c., 255×180mm.

この手書本は集合写本集である。『クアドリパルティートゥス』の部分 (fos. 103r-166v) は、12世紀の第3四半期の間にウスターで作成されたとされている。この手書本に合本されている内容については、表IIIを参照されたい。13世紀までに現在の形に合本されたとされており、手書本全体としては、⁽⁴⁹⁾教会法関係の素材が集められているという印象である。『クアドリパルティートゥス』に収録されているアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。

- ⑦ [Hk] London, British Library, MS Additional 49366, fos. 17r-105r; Latin and French; Mathew Parker, Archbishop of Canterbury (16th c.); the third quarter of the 12th c. or the early 13th c., [a small size (155×110mm)].

この手書本は集合写本集である。『クアドリパルティートゥス』の部分 (fos. 17r-105r) は、12世紀の第3四半期ないし13世紀初めに作成されたと考えられており、

⁽⁴⁹⁾ Wormald, 'Quadripartitus', pp. 116f.

16世紀にこの手書本の形に綴られた。ローマ法に基づいた訴訟手続書である『ウルピアーヌス・デ・エデンド (*Ulpianus de edendo*)』や、後述の『ウィリアムの法 (*Leis Willelme*)』、『エドワードの法 (*Leges Edwardi*)』などが合本されている。『クアドリパルティートゥス』に含まれるアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。

- ⑧ [T] London, British Library, MS Cotton Titus A.XXVII, fos. 89r-160r; Latin; ?; the late 12th or early 13th c., [a small size (185×140mm)].

この手書本は集合写本集である。『クアドリパルティートゥス』が含まれている部分は、12世紀末に由来する可能性がある。獣皮紙である fos. 2-219の部分は、12世紀の第3四半期から13世紀の第1四半期までの間に作成されたとされており、ここには、後述の『クヌートのインスティチュータ (*Instituta Cnuti*)』も含まれる。カンタベリの聖オーガスティン修道院に起源があるのではないかと考えられている。現在の手書本の形に綴られたのは1962年である。全体の内容は表IIIを参照されたい。また、『クアドリパルティートゥス』に含まれるアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。

- ⑨ [Rs] Manchester, John Rylands Library, Lat MS 155 (+ [Ai] BL, Additional MS 14252, 210×160mm★); Medieval Provenance London Guildhall; the early 13th c.

[Rs] については現物を調査できていないが、「初期のイングランド法」の情報によれば、13世紀の初めに作成された「ロンドン・コレクション」と呼ばれる *Leges Anglorum Londoniis collectae* を含んでいる。ウォーモルドによると、「ロンドン・コレクション」は、イネ王からヘンリ2世までの法テキストを集めた法集成で、12世紀より前の期間の法テキストに関しては『クアドリパルティートゥス』を参考⁽⁵⁰⁾にしている。ここに含まれるアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照された⁽⁵⁰⁾い。ロンドン市に起源があるとされている手書本である。

また、次の3点の手書本も、「ロンドン・コレクション」を伝える手書本である。いずれも、14世紀の手書本であるため詳しい紹介を割愛する。

⁽⁵⁰⁾ Wormald, *Making of English Law*, p. 238.

- ⑩ [K2] London, British Library, MS Cotton Claudius D. ii ; Latin; 14th c.
 ⑪ [Co] Cambridge, Copus Christi College, MSS 70 + 258; Latin; 14th c.
 ⑫ [Or] Oxord, Oriol College, MS 46; Latin; 14th c.

(3) パンフレット

- ⑬ [A] (B) London, British Library, MS Harley 55: fos. 5r-13v; Old English; York?; c. 1150⁽⁵¹⁾

これは、前出④として紹介した手書本[A] (A)のfos. 1r-4vに続く部分(fos. 5r-13v)である。この後続部分は、英国図書館のカタログによれば、12世紀の第2四半期ないし第3四半期の作とされているが、「初期のイングランド法」によれば、1150年頃に作成されたとされている。この後続部分は二つの折り丁から成り、ここに書かれた『クヌート第1法典』および『クヌート第2法典』(I-II Cn, fos. 5r-13v)は、独立したパンフレットとして流布していたと考えられている。どの葉も非常に汚れている。各葉の上下の両端の汚れが目立つという印象である。[A]の(A)と(B)の部分は、16世紀末に一つの本に綴られたのではないかとされている。

4 本節で取り上げたノルマン征服以後の時代に由来する手書本の検討からは、アングロ・サクソン諸法は、法のみを集めた法集成や、法のみのパンフレットとして現存していることが分かる。また、ここで取り上げた手書本の中には、サイズが小さいものが多数ある(手書本のサイズを「囲み文字」にしてあるものを参照)。それらの中には、汚れ具合が比較的目立つものもある。裁判実務などの現実生活で比較的頻繁に用いられた可能性を推察させる。

⁽⁵¹⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/A/> (accessed 2016/09/07); Wormald, pp. 164-5を参照。

⁽⁵²⁾ [http://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS041-001882337&indx=2&recIds=IAMS041-001882337&recIdx=1&elementId=1&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&dscnt=0&frbg=&scp.scps=scope%3A%28BL%29&tab=local&dstmp=1473232091821&srt=rank&mode=Basic&dum=true&v1\(freeText0\)=%20MS%20Harley%2055&vid=IAMS_VU2](http://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS041-001882337&indx=2&recIds=IAMS041-001882337&recIdx=1&elementId=1&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&dscnt=0&frbg=&scp.scps=scope%3A%28BL%29&tab=local&dstmp=1473232091821&srt=rank&mode=Basic&dum=true&v1(freeText0)=%20MS%20Harley%2055&vid=IAMS_VU2) (accessed 2016/09/07)

⁽⁵³⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/A/> (accessed 2016/09/07)

⁽⁵⁴⁾ <http://www.earlyenglishlaws.ac.uk/laws/manuscripts/A/>の説明を参照。

⁽⁵⁵⁾ 全ての手書本を閲覧調査できたわけではないが、何れも携帯可能なサイズや形態である⑫[A] (B)と①[G] (A)での汚れが印象に残っている。

第4節 ノルマン征服以降の手書本とその伝来状況—法的著作—

1 本節では、オブライアンが「法書 (Anglo-Saxon Lawbooks)」ないし「法典 (Anglo-Saxon Law codes)」と位置づけている手書本を取り上げる。それらには、ウォーモルドが「法全書」と位置づけたものも含まれている。

オブライアンは、「アングロ・サクソン法書 (Anglo-Saxon Lawbooks)」の手書本は、11世紀以前よりも12世紀に数多く由来することを指摘しつつ、「神判の手引き、破門の方式、そして戴冠式宣誓だけを記載した定式書を除いて、アングロ・サクソン法典 (Anglo-Saxon Law codes) として認識できる一つ以上のテキストを記述している12世紀の現存手書本は17点ある」と述べて、それらを列挙している⁽⁵⁶⁾。そのような12世紀の手書本としては、ウォーモルドが「法全書」や「パンフレット」と位置づけた8点 ([B] …②、[H] …③=⑬、[Dm] …④、[M] …⑤、[R] …⑥、[Hk] …⑦=⑮=⑳、[T] …⑧=⑱、[A] …⑬)⁽⁵⁷⁾ を含みつつ、それ以外にも、ノルマン征服以後のウィリアム1世治世からスティーヴン王治世までの間に作成されたと思われる「法書」(lawbook) ないし「法的論考」(legal treatise) 等の法的著作 (legal works) を収録している手書本の9点 ([Ba] …⑭、[Di] …⑮、[La] …⑰=⑳、[Rl] …⑱=㉓、[Cb] …㉒=㉔、[Ad] …㉖、[Ls] …㉘、[Hv] …㉚、[Lb] …㉜) が挙げられている。ノルマン征服以後の時期に作成された「法書」ないし「法的論考」等の法的著作としては、表Iの通り、例えば、ウィリアム1世治世(1066-87年)ないしウィリアム2世治世(1087-1100年)に作成された『クヌートのインスティチュータ (*Instituta Cnuti*)』、ヘンリ1世治世(1100-35年)に作成された『ヘンリ1世の法 (*Leges Henrici Primi*)』と『クヌートのコンシリアーティオ (*Consiliatio Cnuti*)』、ヘンリ1世治世ないしスティーヴン治世(1135-54年)に作成されたとされる(『ウィリアムの法 (*Leis Willelme*)』)、そしてスティーヴン治世に作成された『エドワードの法 (*Leges Edwardi*)』が挙げられよう。なお、後で触れるように、これらの法的著作は、ウォーモルドが「法全書」や「パンフレット」と位置づけた

⁽⁵⁶⁾ O'Brien, 'Pre-Conquest Laws and Legislators in the Twelfth Century', p. 232.

⁽⁵⁷⁾ ①から⑬までは第3節で取り上げた手書本である。⑭から⑱までは、以下で紹介する手書本である。なお、=は、同一の手書本を指す。

8点のうち4点の手書本(③⑦⑧⑨)にも含まれている。

ウォーモルドは、前述のように、「法だけを含む」手書本を「法全書」として分類して光を当てたが、オブライアンは「一つ以上」のアングロ・サクソン諸法のテキストを含む法的著作にも注目していることになる。後者を、前者と全く同列の法集成として扱ってよいのかは検討の余地のある問題であろうが、複数の法を収めているという点では法集成といえるわけであり、本稿では、オブライアンが注目した法的著作も、法集成として概観しておきたい。

2 それぞれの法的著作については、作者、推定作成時期、作成目的、そして叙述内容および収録・抜粋されているアングロ・サクソン諸法等を個別に検討しなければならないと思われるが、それらは今後の課題とし、ここでは、「初期のイングランド法」の説明に基づいて、13世紀以降に由来する手書本も含め、それぞれの法的著作の手書本の情報とそこに収録されている主なアングロ・サクソン諸法の簡単な説明のみを行なう。

手書本の情報を紹介する際には、ここでは年代順ではなく略号のアルファベット順で示す。また、第3節で紹介した法集成や作品、そして、その他の『グランヴィル』、マグナ・カルタ等のアングロ・サクソン諸法とは別の法が合本されている場合には、それらの法の名称を手書本の推定作成時期の後に記しておいた。

3 手書本

(1) 『クヌートのインスティチュータ』⁽⁵⁸⁾

通称『クヌートのインスティチュータ』として知られる *Instituta de legibus regum anglorum* は、ノルマン征服から1123年頃までの間にラテン語で作成されたもので、作品の中のアングロ・サクソン諸法もラテン語に訳されている。手書本の所蔵と分類番号の後に示したフォリオ番号は、この作品が収められた部分である。この作品に含まれる主なアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。12世紀

⁽⁵⁸⁾ 刊本には、T. Hearne, ed., *Textus Roffensis*, Oxford, 1720; J. L. A. Kolderup-Rosenvinge, ed., *Legum Regis Canuti Magni*, Copenhagen, 1826; R. Schmid, ed., *Die Gesetze der Angelsachsen*, 2nd ed., Leipzig, 1858, appendix; F. Liebermann, ed., *Die Gesetze der Angelsachsen*, 3 vols., Halle, 1903-1916 (以下、*Die Gesetze der Angelsachsen*と略記), vol. 1, pp. 612-17がある。

後半に起源がある可能性がある手書本6点が、この作品を伝えている。前述の通り、⑬ [H] には、同時期に作成された③で取り上げた法集成が、⑱ [T] には、同時期の法集成である⑧の『クアドリパルティートゥス』が含まれている。

- ⑭ [Ba] Paris, Bibliothèque nationale de France, MS lat. 10185, fos. ?; ?; 12th c.⁽⁵⁹⁾
- ⑮ [Di] Oxford, Bodleian Library, MS Digby 13, fos. 41r-53r; Christ Church, Canterbury; the middle of the 12th c.
- ⑯ [H] Strood, Medway Archive and Local Studies Centre, MS DRc/R1 (Textus Roffensis), fos. 58r-80r; Rochester Cathedral; the early 12th c. w. ③の *Anglo-Saxon laws collection*.
- ⑰ [La] London, Lambeth Palace Library, MS 118, fos. 94r-104v; ?; the second half of the 12th c., w. Wl. Art., ④の *ECf3*
- ⑱ [RI] Oxford, Bodleian Library, MS Rawlinson C. 641, fos. 30r-43r; ?; the late 12th c., [a small size (185-88×133-140)].
- ⑲ [T] London, British Library, MS Cotton Titus A.XXVII, fos. 160v-174v; ?; the late 12th or early 13th c., [a small size (185×140mm)]. w. ⑧の *Quadripartitus*

(2) 『ヘンリ1世の法』⁽⁶⁰⁾

この論考は12世紀初めのヘンリ1世治世に作成された法書で、ラテン語で書かれている。ヘンリ1世の時代に用いられていた法を記録すべく著されたものだが、ノルマン征服より前の法テキストも含んでいる。現存する中世起源の2点の手書本のうち、[Rs] には前述の⑨の「ロンドン・コレクション」が含まれている。その「ロンドン・コレクション」では、前述の通り、イネ王からヘンリ2世までの法テキストが集められている。その際、『クアドリパルティートゥス』を参考にしてアングロ・サクソン諸法が収められており、その後の部分に、幾つかの法テキストを挟んで、『ヘンリ1世の法』が書かれている（表IVを参照）。『クアドリパルティートゥス』

⁽⁵⁹⁾ <http://blog.earlyenglishlaws.ac.uk/?m=201101> (accessed 2016/09/07) を参照。この本手書本が『クヌートのインスティチュータ』を含むことを除き、詳細は、現時点では不明である。

⁽⁶⁰⁾ 刊本には、*Die Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, pp. 547-611; L. J. Downer, ed., *Leges Henrici Primi*, Oxford, 1972がある。

の部分と『ヘンリ1世の法』の部分を書いた筆跡が同じであること等から、書記は同一だと判断されている。『ヘンリ1世の法』には、ローマ法や聖書など様々な素材が用いられているが、アングロ・サクソン諸法も用いられており、その場合『クアドリパルティートゥス』が参照された可能性がある⁽⁶¹⁾とされている。収録されているアングロ・サクソン諸法の詳細は表IVには掲載しておらず、今後の検討課題である。

- ②① [Rb] London, The National Archives, MS E 164/2, fos. 36r-50v ; 13th c.
 ②② [Rs] Manchester, John Rylands University Library, MS Lat. 155, fos. 76v-127v; the early 13th c.; w. ⑨の*Quadripartitus*.

(3) 『クヌートのコンシリアーティオ』⁽⁶²⁾

この作品は、12世紀の初めの数十年間の内にラテン語で作成されたものである。作品中の主なアングロ・サクソン諸法については、表IVを参照されたい。手書本2点の内の一つは14世紀のもので、もう一つが12世紀後半に起源がある。後者は、『クヌートのインスティチュータ』と『クヌートのコンシリアーティオ』との混合作品である。

- ②③ [Cb] Paris, Bibliothèque nationale de France, MS Lat. 4771; pp. 1-35; England; a late 12th c.; w. Wl. Art., *ECf3*
 ②④ [Hr] London, British Library, MS Harley 1704; ?; fos. 1r-7v ; by 14th c.; w. *ECf2*, Magna Carta 1225.

(4) 『ウィリアムの法』⁽⁶³⁾

この作品は、ウィリアム1世によって確認された「エドワード証聖王の法」であると主張している。しかし、これはウィリアム1世によって公式に作成されたものではない。そもそもエドワード証聖王が作ったと考えられる法は存在しない。この作品にはラテン語版とフランス語版がある。フランス語版には短篇版と長篇版があ

⁽⁶¹⁾ Downer, ed., *Leges Henrici Primi*, pp. 28-34.

⁽⁶²⁾ 刊本には、*Die Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, pp. 279-371, and *passim*がある。

⁽⁶³⁾ 刊本には、J. Matzke, ed., *Lois de Guillaume le Conquerant*, Paris, 1899; *Die Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, pp. 492-520; A. J. Robertson, ed. and trans., *The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, Cambridge, 1925, pp. 252-75がある。

り、長篇版には12世紀末から13世紀末にラテン語訳が作られた。それを伝えるのが②④のラテン語版である。この手書本は、13世紀ないし14世紀初めに由来する。他方、フランス語版の短篇版の手書本は②⑤で、1175年頃に書かれたと考えられている。フランス語版の長篇版の現存する中世起源の手書本は、1731年のコットン図書館の火災の被害を受けたものを除いて現存しない。しかし、中世起源の手書本（現存しない）からのコピーが4点あるとされる。長篇版に『クヌート第1法典』および『クヌート第2法典』が含まれている。なお、②⑤の手書本では、⑦で取り上げた『クアドリパルティートゥス』が合本されている。

- ②④ Latin version: [S] London, British Library, MS Harley 746, fos. 55v-58v; a late 13th or early 14th c.; w. *Granvill, ECf2, London Collection, Inst Cn, Leis Wl, Wl Art.*
- ②⑤ French version: [Hk] London, British Library, MS Additional 49366, fos. 141r-144v; the third quarter of the 12th c. w. ⑦の *Quadripartitus, Ulpianus de edendo, Leis Wl, Holkham ECf.*

(5) 『エドワードの法』⁽⁶⁴⁾

この作品は、『エドワード証聖王の法 (*Leges Edwardi Confessoris*)』として知られるラテン語の作品だが、エドワード証聖王によって発せられたものではなく、1130年頃に、おそらくリンカンないしより一般的にはデーンロー地域に関係がある作者不詳の作品である。教会の平和や王の平和を扱ったこの作品に含まれるアングロ・サクソン諸法の詳細は表IVには掲載していない。今後の検討課題である。⁽⁶⁵⁾ この作品には、四つのヴァージョンが知られている。

第1ヴァージョン (*ECfI*)

- ②⑥ [Ad] London, British Library, MS Additional 24066, fos. 213r-219v; the 12th and 14th c.; w. *Granvill.*
- ②⑦ [Ck] Cambridge, University Library, Kk. 5.5 33, fos. 69-77; the late 16th c.;

⁽⁶⁴⁾ 刊本には、第1ヴァージョンについては、*Die Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, pp. 492-520が、第2ヴァージョンについては、*Die Gesetze der Angelsachsen*, vol. 1, pp. 627-70; O'Brien, *God's Peace and King's Peace: the Laws of Edward the Confessor*, pp. 158-203がある。

⁽⁶⁵⁾ 前掲註 (64) の研究を参考に検討したい。

w. *Granvill.*

- ⑳ [Do] Oxford, Bodleian Library, MS Douce 137, fos. 9v-94v; the late 13th or early 14th c.; w. *Granvill.*
- ㉑ [Ls] London, Law Society, MS 1 (L. 16), fos. 79v-87r; c.1200; w. *Granvill.*
- ㉒ [No] Alnwick, Duke of Northumberland, MS 445, fos. 99v-103r; 14th c.; w. *Granvill.*
- ㉓ [Wo] Worcester, Worcester Cathedral, Dean and Chapter MS F. 87, fos. 20v-22r; the late 13th or early 14th c.; w. *Granvill.*

第2ヴァージョン (*ECf2*)

- ㉔ [Ar] London, College of Arms, MS Vincent 98, fos. 36r-41v; ?; w. *Inst Cn.*
- ㉕ [CI] London, British Library, MS Cotton Cleopatra A.XVI, fos. 56r-61v; approximately the first half of the 15th c.
- ㉖ [Ha] London, British Library, Harley MS 785, fols. 6-iiiv; the late 16th of 17th c.; *Inst Cn.*
- ㉗ [Hk] London, British Library, MS Additional 49366, fos. 144v-154r; the third quarter of the 12th c. to ca. 1230. ; This is called *Holkham ECf*; w. ㉑の*Quadripartitus*, *Ulpianus de edendo*, *Leis Wl.*
- ㉘ [Hr] London, British Library, Harley MS 1704, fols. 7v-12v; the first quarter of 14th c.; *Cons Cn*, Magna Carta 1225.
- ㉙ [Hy] London, British Library, MS Harley 261, fo.? ; the Cathedral priory of St Andrew, Rochester; the last quarter of the 12th or the first quarter of the 13th c. ; w. *Quadripartitus*.
- ㉚ [PI] London, British Library, MS Additional 35179, fos. 4r-8v; from 1254 to 1 Edward I (1272/73).; w. *Inst Cn*, *Wl. Art.*, *Granvill.*
- ㉛ [RI] Oxford, Bodleian Library, MS Rawlinson C. 641, fos. 3r-10r; the late 12th c.; [a small size (185-88×133-140)]; w. ㉓の*Inst Cn*, *C Hn cor*, *Wl Art.*, *Granvill*, Magna Carta 1215.
- ㉜ [S] London, British Library, MS Harley 746, fos. 49-54v; the late 13th or early 14th c.; w. *Glanvill*, *ECf2*, *Wl Lond*, *Leis Wl*, *C Hn cor*, Magna Carta

1215, the Charter of the Forest, Magna Carta 1225, *Inst Cn*, Wl Art.

第3 ヴァージョン (*ECf3*)

- ④ [Cb] Paris, Bibliothèque Nationale, MS lat. 4771, pp. 37-55; the late 12th c.; w. ②の *Cons Cn*.
- ④ [Hv] London, British Library, MS Royal 14 C.II, fos. 215r-223v; the early 13th c.; w. *Granvill*, Wl Art.
- ④ [La] London, Lambeth Palace Library, MS 118, fos. 195r-205r; the second half of 12th c.; w. ①の *Ins Cn*, Wl Art.
- ④ [Lb] London, Lambeth Palace Library, MS 179, fos. ?-86; the early 13th c.-17th c.
- ④ [Cu] Cambridge, University Library, MS Ee. 1.1, fos. 3v-8r; the 13th and 14th c. c; w. Wl Art.: Anglo-French translation.

第4 ヴァージョン (*ECf4*)

- ④ [Rs] Manchester, John Rylands University Library, MS Lat. 155, fos. 54r-74r; the early 13th c.; ⑨の *London Collection*.

4 今後、『ヘンリ1世の法』と『エドワードの法』に含まれるアングロ・サクソン諸法については詳細を確認する必要があるものの、本稿での検討から判明するのは、ここで取り上げた法的著作の中に含まれるアングロ・サクソン諸法の数は、第3節で取り上げた「法全書」の場合と比べると、少なく見えるということである。

とはいえ、手書本単位で見ると、同一手書本の中の、同一のないしほぼ同一の時代に作成された部分に、[Hk]…⑦=⑤=③には、「法全書」と位置づけられた『クアドリバルティートゥス』、『ウィリアムの法』、そして『エドワードの法』が含まれており、[H]…③=⑩、[T]…⑧=⑨には、「法全書」と位置づけられた法集成と『クヌートのインスティチュータ』が含まれていることは注意すべきであろう。また、[La]…⑩=④や、[RI]…⑩=③では、『クヌートのインスティチュータ』と『エドワードの法』が、[Cb]…⑩=④では、『クヌートのコンシリアーティオ』と『エドワードの法』が含まれている。さらに、『エドワードの法』を手書本単位で見ると、そこには、『グランヴィル』やマグナ・カルタ等の様々な法が合本されているこ

とが興味深い。

13世紀初めに由来する手書本ではあるが、[Rs]…⑨=④⑥についても触れておこなうら、[Rs]では、同じ13世紀初めに由来する部分に、「法大全」と位置づけられた『クアドリパルティートゥス』、『ヘンリ1世の法』、そして『エドワードの法』が合本されている。

今後の研究においては、以上の情報を前提に、アングロ・サクソン諸法の「法全書」であれ、法的著作であれ一法集成を、作品単位で分析するだけでなく、手書本単位で分析することによって⁽⁶⁶⁾、それらの作成目的や利用状況を明らかにしていきたいと考える。

おわりに

1 最後に、本稿における考察から確認することができた点や指摘することができる点をまとめとして示しておきたい。

第1に、ウォーモルドやオプライアンが既に指摘しているように、アングロ・サクソン諸法を伝える手書本のうち、現存するものの大多数は、アングロ・サクソン時代ではなく、その後のノルマン征服以後の時代に由来しており、中でも12世紀に由来する手書本の多さは際立っている。また、アングロ・サクソン諸法を伝える手書本は、ノルマン征服の前後にわたって現存しているが、ノルマン征服以後の手書本でのみ伝来しているアングロ・サクソン諸法の法テキストが非常に多い。さらに、12世紀に由来する手書本では、ウォーモルドが「法全書」と呼んだところの、法のみを集めた法集成が、それ以前の世紀とは異なって数多く現れることが分かる。

第2に、法のみを集めたそのような法集成の中で、複数の手書本によって伝来し

⁽⁶⁶⁾ 法書に関する次の指摘、すなわち「一般に『法書』あるいは『慣習法書』と称される史料類型は、次のように定義されている。すなわち、それは法学者ないし実務家によって、自らの地方の慣習についての私的な名義で編纂された法の記録であり、公的性格をもたないが故に、裁判官を拘束するものではない、と。しかし、法書の写本の伝来状況を検討してみると、必ずしも当時の人々(直接的には写本の筆写者ないし所持者)がそのように明確に意識していたわけではないことが判明する」(直江真一、前掲論文、247頁)に注意したい。法書『グランヴィル』が含まれる集合写本集には、例えば、『マグナ・カルタをはじめ『グランヴィル』以後の法集成、とりわけ『令状方式書』(Register of Writs)を含む写本を含む写本集』もあり、この場合には、「裁判実務に関する写本集として実際に利用されていた」ことが推測されている(同論文、248頁)。

ている『クアドリパルティートゥス』は、12世紀前半の編集時の草稿版のコピーとして伝来しており、現存するコピーの多くは、12世紀後半ないし13世紀初めに属する。『クアドリパルティートゥス』の書記は、おそらくこの作品を作成するために、「より小さな集成」を参照したのではないかと考えられており、この作品が作成される際には、先行する法集成が存在していたと考えられる。実際、『クアドリパルティートゥス』以外にも、法集成が現存している(① [G]、② [B]、③ [H])。それらは、いずれも、11世紀初めないし11世紀半ばから12世紀までの手書本である。収録されているアングロ・サクソン諸法の順番を見比べる限り、『クアドリパルティートゥス』の書記が、[G]、[B]、[H]、のいずれかの手書本を参照したとは思われないことから、現存しない別の法集成の存在が推察される。そして、現存する手書本から判断する限り、アングロ・サクソン諸法の法集成の編集は11世紀半ば頃から始まるが、法集成の編集ないし筆写は12世紀に、そして特に筆写は12世紀後半に、全盛期を迎える。

ところで、法集成の編集や筆写は、実は、11世紀から12世紀にかけて、教会法の分野で盛んに用いられた手法である。この点で、第3に、現存する手書本のうち起源が判明しているもののなかで目に止まるのは、ロンドン司教座聖堂であるセント・ポール聖堂(② [B])、ロチェスタ司教座聖堂(③⑩ [H])、ウスター司教座聖堂(⑥ [R])、カンタベリの聖オーガスティン修道院(⑧⑱ [T])、カンタベリ大司教座聖堂附属修道院クライスト・チャーチ(⑮ [Di])、ロチェスタ司教座聖堂附属修道院(⑳ [Hy])といった教会関係施設である。教会法で用いられたのと同様の手法が、アングロ・サクソン諸法についても用いられたのかもしれない。ただし、現在調査できた手書本を見た限りでは、アングロ・サクソン諸法の法集成の場合は、教会法の分野でしばしば用いられたような、原典を囲むようにして書かれる註積はない。学問的研究の対象ではなかったことを物語っているのかもしれない。

第4に、「法書」や「法的論考」等の法的著作にも一収録されている法は比較的小

(67) Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon Legal Texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', pp. 537-538.

(68) B. O'Brien, 'An English Book of Laws from the time of Granvill', p. 63. この時期には、数多くの教令集成 (a decretal collection; a collection of decretals; a collection of papal letters) が編集された。

なく見えるもの—複数のアングロ・サクソン諸法が収集されている。法的著作の叙述内容の検討は今後の課題だが、法的著作の手書本の中には、同時代の「法全書」が合本されていたり、同時代の別の法的著作が合本されたりしているものも複数ある。

第5に、手書本のサイズに着目すると、法集成の中には、携帯可能な小さなサイズのものが比較的多い。① [G]、② [B]、③ [H]、④ [Dm]、⑦ [Hk]、⑧ [T]、⑩=⑳の [RI]、⑲ [T] がそうである。また、パンフレットの形で持ち運ばれたと考えられるものも現存しており、⑬ [A] だけでなく、⑮ [Di] もそうだと考えられている。⁽⁶⁹⁾ 裁判実務などで用いられていた可能性が推察される。

2 以上を踏まえ、今後は、アングロ・サクソン諸法の一「法全書」であれ、法的著作であれ—法集成を、作品単位で分析するだけでなく、手書本単位で分析する必要があることを念頭に置いた上で、(1) 筆写者や所持者等の意図⁽⁷⁰⁾、(2) 法集成の中に選択・収録されているアングロ・サクソン諸法の順序や内容⁽⁷¹⁾、(3) 筆写時点での変更内容⁽⁷²⁾、(4) 古英語からラテン語やフランス語への翻訳の問題、(5) 教会的な関心との関連⁽⁷³⁾について検討を加え、アングロ・サクソン諸法の法集成が盛んに編集・筆写された理由ないし目的を解明したい。それにより、ノルマン征服から13世紀初めまでの時期、とりわけ12世紀後半という時期を、コモン・ロー形成史の文脈のみで捉えることを超えて、広くイングランド法史の中に位置づけることを試みたい。⁽⁷⁴⁾

⁽⁶⁹⁾ B. O'Brien, 'An English Book of Laws from the time of Granvill', p. 52 n. 5.

⁽⁷⁰⁾ 前掲註(7)(8)(9)で取り上げた研究も参考にしたい。

⁽⁷¹⁾ 収録されているアングロ・サクソン諸法は、年代順ではない。「アルフレッド王法典」と「イネ王法典」(Af-Ine)は、ほぼいつも結びつけられていること、「クヌート第1法典」と「クヌート第2法典」(I-II Cn)とはいつも取り上げられていること、「エドワードの法」の手書本の多さには注意が必要であろう。

⁽⁷²⁾ Gobbitt, 'The Twelfth-century Rubrication of Anglo-Saxon legal texts in Cambridge, Corpus Christi College, MS. 383', pp. 541, 547, 548における修正に関わる考察や指摘も参考にしたい。

⁽⁷³⁾ 法集成の筆写活動と教会との関係については、T. Gobbitt, 'Law-Codes', in *English Manuscripts*, available at http://www.le.ac.uk/english/em1060to1220/culturalcontexts/2_Law.htm (accessed 2016/09/09)も指摘している。神学の論考やカノン法などともに合本されているものについては、O'Brien, 'An English Book of Laws from the time of Granvill', p. 53 n. 6も参照。⑦⑮⑳で取り上げた [Hk]、⑥で取り上げた [R]、⑩⑳で取り上げた [RI] では、神学、教会法、或いは教会の訴訟手続に関する作品が合本されている。

⁽⁷⁴⁾ その際、D. Bates, '1066: does the date still matter?', *Institute of Historical Research*, vol. 78, no. 202, 2005, pp. 443-464も参考にしたい。

【付記】誠に拙い論考ですが、長年ご指導いただいた直江眞一教授に本稿を献呈いたします。本稿の源は、西欧中世史研究会2014年度夏季合宿（於東北大学、2014年8月23-25日実施）での報告にあります。報告の際に質問や意見等をお寄せくださった皆様にはお礼を申し上げます。また、本稿はJSPS科研費JP16K03265の助成を受けたものです。